

## 論文内容の要旨

報告番号		氏名	黒川 紘章
Total ankle arthroplasty incorporating a total talar prsthesis (和訳) 人工距骨併用の人工足関節置換術			

### 論文内容の要旨

末期変形性足関節症に対する手術治療として、人工足関節置換術(TAA)がある。TAA の術後合併症の一つにインプラントのゆるみが増えられる。我々は特に術前の距骨の変形が重度である症例に対してカスタムメイドの人工距骨を作成し、距骨インプラントとして用いた。今回の目的は人工距骨を併用したTAA(Combined TAA)の臨床成績を述べることである。

2009 年以降当科で手術治療し、術後 3 年以上経過観察が可能であった症例で Combined TAA 群 10 例 10 関節、通常の距骨インプラントを用いた Standard TAA 群が 12 例 12 関節。それぞれ術後平均観察期間は 58 ヶ月(43 から 81 ヶ月)と 64 ヶ月(48 から 88 ヶ月)。原疾患は全例変形性足関節症であった。手術時平均年齢はそれぞれ 71 歳(61 から 82 歳)と 75 歳(62 から 82 歳)であった。術前後の Japanese Society for surgery of the foot(JSSF スケール)、the Ankle Osteoarthritis Scale(AOS)と術後 the Self-Administered Foot Evaluation Questionnaire(SAFE-Q)を用いて評価した。

Combined TAA 群では JSSF が術前 44 から 89 に、AOS で疼痛が 5.8 から 2.5、機能 5.5 から 2.2 に改善しており、SAFE-Q の下位尺度で痛み・痛み関連が 76、身体機能・日常生活の状態が 66、社会生活機能が 73、靴関連が 73、全体的健康感が 78 であった。これに対して Standard TAA 群は JSSF が術前 49 から 72 に、AOS で疼痛が 8.6 から 2.5、機能が 7.1 から 3.4 に改善しており、SAFE-Q の下位尺度で痛み・痛み関連が 70、身体機能・日常生活の状態が 55、社会生活機能が 62、靴関連が 65、全体的健康感が 67 であった。手術時年齢や術前 JSSF で両群間に有意差がなく、術後 JSSF は Combined TAA 群で有意に改善していた。SAFE-Q では両群間で有意差は認めないもののすべての下位尺度で Combined TAA 群が良好であった。

術前の距骨の変形が重度であるような症例に対して、距骨インプラントとして人工距骨を併用した Combined TAA は良い手術方法であるといえる。